

蟻の一穴

失言ではなく本音

東京都議会の「やじ」問題だけでなく、国会議員や市長といった「公人」と呼ばれる人たちが自分の発言を「失言でした」と撤回したり謝罪する光景は、日本社会では半ば常識化してる。国民も、「撤回したし、詫びたんやから」と許す風潮もある。

せやけど、あれこそ腹の中をさらけ出した本音で、失言でも何でも無い。思っていないことを言ったのと違う。

そもそも「言葉」って何や？「言霊（ことだま）」と言うくらいやから、言葉には魂が込められてる。「うっかり」とかいう次元ではないところで言葉は発せられてるものや。自分の言ったことを取り消すということは、魂を取り消すということ。取り消すことのできるくらい言葉を「公人」が社会に向けて発するほうがおかしい。言霊があるから言葉に情熱がこもるわけやし、台本なしに自分の考えをしゃべることができる。

失言をさせない、つまり魂なんかこもらなくてもいい発言をさせたいから、議会では秘書や役人が書いたものを読んでるんやと思うけれど、それは、単なるスムーズな議事進行のためでしかない。目的が、議員の情熱を国民に理解してもらうことではなく、時間内に問題なく終わらせることにある。腹の中にあることを出してしまったら、危うくなるからや。

都議会の「やじ」は、まだ名乗り出していない議員がおるけれど、おそらくやむやにされて終結してしまうやろな。

どうしても日本社会は男尊女卑の空気が根強く残ってる。法案に直接関係する異議申し立てとしての「やじ」ではなく、明らかに女性だから浴びせられた下品な言葉でしかない。女性という性を持った人権への差別が常に腹の中にあるということや。そんな人間が都議会議員になっているということ。外国ではこれは大問題になるはず。

言葉は重い。代議士用語ばかり身に付ける前に、言葉に責任を持つ、言霊に責任を持つ、そういう当たり前のことを身に付けてから議員になるべき。「失言でした」と撤回したところで腹の中は変わってないわけやから、選挙民からしたら、「そんな人やったんか？」という疑念みたいなものは消えへん。

そういう意識が希薄な社会というのは、議会制民主主義が成り立たへん。発言を撤回されたら、それこそ言い直しが何でもありになってしまうし、都合のいいように言い換えられるんやから、無責任が許されるということ。憲法なんか関係なく、集団的自衛権の行使容認を閣議決定するのと何ら構造的には変わらん。日本は「蟻の一穴」が始まってると感じる。

日本の選挙は、「地盤、看板、カバン」と言われるように、支持組織と知名度と金が必要とされてきた。だから、それがあれば選挙に勝つことはできる。だけど、勝っても中身が伴ってない。どんな躰や教育を受けてきたか、どんな心配りができるか、そういう大事なことが欠けている。だから、代議士になったところで、社会の現実、社会の底辺で何が起きているのか分からない人間が圧倒的に多いし、そういうものへの感覚がない。

世の中は単純労働で成り立っている。そんなことすら理解できないんとちがうやろか。単純な仕事を多くの人がやっているからみんなが生きていけるインフラがつくられているんや。客商売やから、あんまり表には出ないけれど、酔った「センセイ」たちがタクシーの運転手に暴言を吐いたりするのは、夜の人格こそ本当の姿だからや。単純労働を低く見ているのやろうし、自分たちはあんたたちとは違うんやという思い上がり。

イギリスの「ロンドンタクシー」の運転手は、厳しい検定試験に受かった人しか免許がもらえないという誇りを持っているし、街の道路やアパートの名前まですべて頭に入ってるから、乗客から尊敬もされる。劇場でどんな芝居をやっているかまで勉強してる。観光客から歴史を聞かれても答えられるだけの知識も当然ある。ロンドンタクシーの運転手は個人事業主やから、乗せたくないお客を乗せないという選択権もある。自分の仕事に誇りを持って、個人が尊重される社会では、おそらく人を見下したような「失言」などはありえへんやろな。

脱法ハーブと集団的自衛権

学歴ばかり追いかけて、その果てに、セクハラ発言、人権侵害、前言撤回、お詫び行脚、閣議決定、原発輸出……。それは大人の世界だけのことやない。

ある店で、店長がアルバイトに掃除をさせていた。国立大学二年生の女の子。「掃除できました」。見ると、棚の下はホコリだらけ。「ここも、やってください」「はい……やりました」「次の棚の下はまだ終わってないよね?」「はい」「もっと綺麗にできないの?」「このハンドモップの使い方が分かりません」「自分の部屋は掃除しないの?」「週に一度、母が来てくれて、掃除と洗濯をやってくれます。ただ、掃除ができるようになることは、ここでアルバイトとして仕事

をすることに必要なんですか？」……。

「常識でしょ」と言おうにも、もはや常識というものがない受験戦争を勝ち抜いた優秀な国立大学の学生。論文は書ける、でも掃除はできない。国が崩壊する「蟻の一穴」を、ここにも見る。

店長曰く、「今は、程度の差はあれ、みんな同じようなものです」。彼女が親になったとき、子どもに何を躰けられるんやろ？少数ではない。感覚としてやけど、大学生の半数はそれに近いんとちがう？もはや「今どきの大学生は」という言い方が成り立たへんのは、そういう学生が多いからやろと思う。無気力・無関心・無責任の「三無主義」とか、無感動・無作法をくっつけて「五無主義」とか言われたけれど、それが普通になってくると、そういう言葉も聞かれへんようになってきた。もはや、そっちが常識か？

常識のない世代は、今や「スマホ」の中に常識がある。ずっと日本語で言い表してきた「人間関係の常識」は、スマホによって打ち破られてる。

「LINE (ライン)」で連絡する。読んだら「既読」が表示される。そういうコミュニケーション手段が当たり前になると、「既読」にならない、つまり読んでもらってないことが分かると、「なぜ読まないんや」と怒りの感情が出てくる。実に他愛無いことしか書き込んでいないのに、それに関わらなかつたり、まじめな話を書き込もうものなら、攻撃の対象にされるか除け者扱い。「もう遅いから寝るよ」「親がうるさいから今日はこのへんで」という「常識」がいじめや喧嘩の原因になる。そうすると、バーチャルネットワークの世界で平気で行われているいじめや争いが、現実世界でも平気な感覚でできてしまう。「ちょっと見せて」と言われて気軽に撮らせた裸の写真が、いつの間にかネット上に広まってる。それらを規制する法律は、まったく追いついていない。

スマホやネットでの犯罪者が言うのは「みんなやってること」。個人的に扱うべきものが、何のためらいもなく社会化される。スマホの常識は現実世界の非常識、それが分かっている。

スマホ世代の若者が見ているのは、間違いなく大人の世界。警察官や自衛官がパワハラで自殺する、いじめられて自殺する、そういう現実をしっかりと見てる。「あの子、キモい」「死ね」「殺す」その一言のつぶやきが、瞬時に社会に広がる。言葉への恐れがないという恐ろしさ。「なぜダメなの？スマホじゃん。直接言ってないし」「大人の社会でもやってることでしょ」と言われてしまえば、彼らを当てにしてビジネスをやっている大人も、規制をつくれぬ国も、反論できない。そこを「一穴」は突いてくる。防ぐ手段がない。

「脱法ハーブ」を吸って運転した車が池袋の人通りに突っ込んだ。「脱法」「ハーブ」というまやかしが、そもそも間違ってる。「違法な麻薬」や、実際には。バーチャル空間での「死ね」と一緒に、「違法ではないんでしょ」という垣根の

低さを感覚として持っている。

しかも、規制しても、わずかに成分を変えればその枠にかからないことを、よく知っている。しかも、押収した「脱法ハーブ」が違法かどうかを調べるのに二千件待ちという現実。吸ったやつを捕まえていても、これは追いつかない。作るほう、売るほうを捕まえるべきや。予防のほうにしか対応策はないんやと、なぜか分からない。ネズミ捕りばっかりしてても事故は減らんのと同じ。ストーリー被害も、捕まえてるだけじゃアカン。テリトリーで捜査してても根本的対策にはならへん。いったい何人の命が犠牲になれば変わるんや？問題はすべて、予防できないから起こるんや。根本的な問題を見るべきやろ。

クラーク博士が「少年よ大志を抱け、この老人のように」と言うたけれど、大人（おとな）が大人（だいにん）になっていない。小人（しょうにん）のまま代議士になり、警察官になり、ビジネスマンになる。だから、「脱法ハーブ」の呼び方と「集団的自衛権」の行使容認は、同じこと。解釈変えて、なんぼでも色づけできるというのは、それこそ「脱法」やろ？

東京オリンピックまで国の借金を増やしながらか「アベノミクス」の中毒患者をどんどん増殖させようという魂胆なんやろうけれど、目先の欲だけで進んでいくことに共通した結果を見れば、オリンピックが終わった途端に経済も、政治も、犯罪も、めちゃくちゃになるんがちがう？誰かに考えさせてれば間違いないとか、スマホにやってもらえるからええとか、現実はそんなこと通用せえへんで。自分の頭や自分の国を自分で壊していくって、ほんまに人間なんやろか？日本人なんやろか？

文明国って何やろ？国のレベルってどこで見るとやろ？